SHOW-HEYシネマルーム

★★★★★

ほとりの朔子

2013年・日本、アメリカ合作映画
配給／和エンタテインメント・125分

2013（平成25）年12月26日鑑賞 | シネ・ヌーヴォX・試写会

Data

監督・脚本・編集・コプロデューサー：深田晃司
プロデュース：杉野希妃
出演：二階堂ふみ／鶴田真由／太賀／古舘寛治／杉野希妃／大竹直／小篠恵奈／渡辺真起子

みどころ

私の大好きな女優兼プロデューサーである杉野希妃が、私が絶賛した『歓待』（１０年）の深田晃司監督と再び組み、私の大好きな女優・二階堂ふみと鶴田真由を起用して、すばらしいオリジナル作品を！

そもそもタイトルからして意味シンだが、２週間の夏休みを海のほとりのまちで叔母と２人で過ごす１８歳の女の子は、どんな「ひと夏の経験」を？

『地獄でなぜ悪い』（１３年）『四十九日のレシピ』（１３年）におけるエキセントリックな演技も面白かったが、本作で二階堂ふみがみせる等身大の瑞々しい演技に注目！こんな良質な邦画こそ、もっと拡大して上映してほしいものだが・・・。

——*——*——*——*——*——*——*——*——*——*——

■□■新旧のベストコンビに注目！こりゃ必見！■□■

個性派美人女優大好き人間の私が、近時最も注目している女優が二階堂ふみ。そんな彼女について私は、『ヒミズ』（１２年）では「この二階堂ふみは第２の宮﨑あおいに！それは、一般的な美人といえないところが宮﨑あおいと同じなら、どんなケッタイな役でもやれそうなところも宮﨑あおいと同じ。そして何よりも目の力の強さが宮﨑と同じだから・・・。」（『シネマルーム２８』２１１頁参照）と書き、『地獄でなぜ悪い』（１３年）では「『キネマ旬報』の対談でも、石飛徳樹氏は、『ヒロイン・ミツコ役を演じた二階堂ふみはエロかっこよかったですね……　すごくよかった！』、勝田友巳氏は『確かに今回は園子温監督作品のなかではエロは控えめ。二階堂ふみが一人で“エロ”の部分を背負っていました』と絶賛している。そんな彼女を見れば、今や二階堂ふみはすでに宮﨑あおい超え！」（『シネマルーム３１』２５０頁参照）と書いた。

他方、知性派かつ正統派美人女優として私が昔から大好きな女優が鶴田真由。『さよなら渓谷』（１３年）での出番は少なかった（『シネマルーム３１』２４頁参照）が、私が大好きだったのは、『カーテンコール』（０４年）における彼女の演技（『シネマルーム７』２９６頁参照）。本作には、叔母の海希江役で鶴田真由が、姪の朔子役で二階堂ふみが登場するので、そんな新旧のベストコンビに注目！

また本作は、私の大好きな女優兼プロデューサーである杉野希妃が『おだやかな日常』（１２年）（『シネマルーム３０』２０９頁参照）に続いてプロデューサー兼女優として出演するから、こりゃ必見！さらに本作は、私が絶賛した『歓待』（１０年）（『シネマルーム２７』１６０頁参照）の深田晃司監督が、監督・脚本・編集・コプロデューサーした映画だから、こりゃ必見！

■□■ひねったタイトルと、等身大の瑞々しい演技に注目！■□■

後述のように、本作に登場する人物はそれぞれ名前（の読み方）が難しいうえ、人間関係もかなり複雑。しかも、最近の安っぽいテレビドラマの延長のような「説明」がなく、それはセリフの中で語られるだけだから、それを正確に理解するのは結構難しい。そもそも、本作のタイトル『ほとりの朔子』とは一体どういう意味？

アベノミクスの「３本の矢」は①大胆な金融緩和②財政出動③成長戦略だが、その第１の矢を大胆に放ち、「異次元の金融緩和」をしたのが、２０１３年３月に日銀の新総裁に就任した黒田東彦（はるひこ）氏。ところで、あなたはこの名前を読める？それと同じように、朔子を「さくこ」と読める？萩原朔太郎のさくと言えばわかるはずだが、深田晃司監督の脚本は、二階堂ふみ扮するヒロインの名前自体が難しい。

また、海のほとり、川のほとり、山のほとりといえば何となくわかるが、「ほとりの朔子」とはどういう意味？冒頭、朔子とその叔母・海希江が、海希江の姉で同じく朔子の伯母にあたる水帆（渡辺真起子）の家を訪れるシークエンスが登場する。この２人は暑い夏休みの後半８月２６日以降の２週間を外国旅行に行く水帆の家で過ごすらしいが、到着し挨拶を済ませた後、２人が散歩に出かけている風景を見ると、この家は海辺の町にあることがわかる。すると、タイトルを素直に読めば「海のほとりにやってきたヒロインの朔子」というだけの意味だが、本作を観ていくと、なかなかどうして、そんな単純なものではなさそうだ。海の対極は山、そして子供の対極は大人だが、どうも本作は、海と山のほとりで揺れ、また子供と大人のほとりで揺れていくヒロイン朔子を描く映画らしい。

二階堂ふみは『地獄でなぜ悪い』『四十九日のレシピ』（１３年）（『シネマルーム３１』５１頁参照）ではかなりエキセントリックな役柄を演じたが、本作ではそんな「ほとり」で揺れ動く１８歳の女の子の気持ちを等身大で実に瑞々しく演じている。『ヒミズ』は、まだまだ子供の二階堂ふみだったが、本作に見る二階堂ふみはまさに「ほとりの朔子」！

■□■ややこしい人間関係その１、朔子の母親は？■□■

鶴田真由は１９７０年生まれだから、彼女を１９９４年生まれの二階堂ふみの母親役に設定するのは少しかわいそう。したがって、冒頭２人が電車に乗って、水帆の家を訪ねてくる時の２人の「親族関係」が姪と叔母というのは、なるほどとうなずける。ならば、朔子の母親は一体誰？海希江と水帆が朔子のオバさんなら、朔子の母親はその姉妹のはずだが、２人の会話を聞いていると、そこらあたりはかなり複雑だ。

インドネシアの歴史を研究している海希江は、水帆宅での夏休みのラスト２週間を、インドネシア語の本の翻訳作業に充てるという明確な目的をもっているらしい。それに対して朔子の方は、ガリ勉タイプなのに本命の大学にも滑り止めの大学にも落ちてしまったため目下現実逃避中だから、水帆宅で過ごす夏休みのラスト２週間は何の目的もなさそうだ。

海辺を散歩したり、山辺を散歩したりする中での２人の会話を聞いていると、そこらのチグハグさが顕著だが、朔子はこんなに知的で尊敬に値する海希江叔母さんから、この２週間の間に何をどのように吸収していくの・・・？

■□■ややこしい人間関係その２、辰子の母親は？■□■

朔子と海希江が訪れたこの海のほとりにあるまちは、海希江の故郷だから、幼なじみがたくさんいるのは当然。ホテルの雇われオーナーだという兎吉（古舘寛治）はその一人だが、実はそのホテルはビジネスホテルを装っているだけのラブホテル？娘の辰子（杉野希妃）が通っている女子大がすぐ近くにあるから、最近はその女子大でもこのホテルの追放運動が起こっているらしい。朔子は海水浴中にそんな辰子と知り合い、誘われるままに辰子がバイトをしている海の家を訪れたが、そこで聞かされたのは、おやじの兎吉の悪口ばかり。この父娘は一体ナニ？

もう一人朔子が紹介されたのが、兎吉の甥で、兎吉のホテルでバイトをしているという孝史（太賀）。彼は福島原発事故のため、この海辺のまちに避難しているらしい。ある目的で山に向かっていた海希江と朔子が、自転車に乗っていた兎吉と孝史に出会った後、２人乗りで２台の自転車に分乗して目的地に向かったが、なぜ兎吉・海希江組は孝史・朔子組より大幅に到着が遅れたの？深田晃司監督はストーリーの説明を一切しないが、そこに何らかの曰く因縁があることは明らかだ。

他方、杉野希妃は１９８４年生まれながら美人顔だから、若い役でも十分つとまるが、本作にみる女子大生役はさすがにちょっとしんどそう。兎吉はそんな一人娘の辰子を可愛がっているようだが、その母親は一体誰？

■□■ややこしい人間関係その３、大人たちの男女関係は？■□■

朔子は目下１８歳の浪人生だから、再度受験勉強に向けてエンジンをかけなければならないことはわかっていても、このクソ暑い中、しかも夏休みで海辺のうちを訪れている今、勉強する気になれないのは仕方ない。するとその分、地域研究をしているという海希江の生き方やその人生観、男性観をいろいろと聞き、吸収したいと思うのは当然。また、夏休み中にこんな田舎の海辺のまちに来ると自然に気分が開放的になるから、はじめて知り合った人たちへの興味が湧いてくるのも当然だ。したがって、朔子はまずは毎日一緒に過ごしている海希江に対していろいろな疑問をぶつけて知識を吸収するとともに、はじめて出会った兎吉や辰子からもさまざまな情報の吸収を。しかし、はじめて兎吉のホテルを訪れてみると、どうしても「ここはラブホテル？」という疑問が湧いたが、そんなことを聞いていいの？また辰子は年齢が近く親しみやすい存在だが、彼女が思わせぶりに言う秘密のプレゼントとは？

そんな風に日々さまざまなことを学習している朔子が新たに出会ったのが、女子大で講義するためこの海辺のまちにやってきたという西田（大竹直）。この男は人気の大学教授らしく一見紳士的だが、海希江と接している態度を見ていると、これまたかなり曰く因縁がありそう。しかして、本作中盤のハイライトになるのが、兎吉宅での辰子の誕生日パーティーだ。朔子は兎吉からの電話の誘いにホイホイと応じ、西田にも同行を勧めたが、西田は「何で俺が一緒に行くの？」という気持ちがありあり。したがって、強引に連れて行かれた兎吉宅での、下ネタまで突っ込んだきわどい会話になると、西田はたじたじ・・・。子ども以上だが、まだ大人未満の朔子は、そんな大人たちの含蓄の多い微妙な男女関係に関する会話を黙って聞いているだけだったが、さて彼女はどこまでその意味を理解できているの？スクリーンを見ている私たち観客も、西田と海希江の２人だけの会話を聞き、その行動を見てビックリ！さらに、女子大での講義を聴いた辰子が、帰り道に西田の車の中で交わす会話と、その後の展開にもビックリ！何とも男女関係とはややこしいものだ･･･。

■□■これは朔子の初恋？プチ家出の結末は？■□■

今季節は夏の盛りが過ぎたとはいえ、残暑厳しき折り。また、朔子が今来ているのは海辺のまちだから、服装が開放的になるのは当然だ。日々の動きを日記調に追う（？）本作

では、日々の朔子のファッションも楽しむことができる。しかして、孝史の自転車に２人乗りをしてやってきたある「目的地」では、兎吉・海希江組の到着が大幅に（？）遅れたため、ついつい朔子と孝史の２人だけの話が盛り上がることに。さらに、真っ赤なノースリーブのワンピースの上に着ていたボレロを脱ぎ、裸足で池の中に入り、水をすくっている朔子の姿を見ると、いかにもまぶしそうな女の色香が・・・？そんなことはないはずだが、福島の被災地からたった一人でこの海辺のまちにやって来て、兎吉のホテルでバイトをしている孝史の目には一瞬そんな風にも・・・。朔子にとって孝史は唯一人同年代の男の子だから、孝史に対してだけは他の大人たちに対する態度と違うものになったのは当然だが、さて、異性としての意識はどの程度？朔子と一緒に浜辺を歩いている時にすれ違った女の子・知佳（小篠恵奈）と孝史が親しそうに話をしていたため、朔子が孝史に「ガールフレンド？」と聞いたのは当然だが、その質問にもどの程度の重みが？

喫茶店ではじめてのデート（？）を楽しみ、朔子が孝史に焼き肉を奮発している時に、孝史の携帯に知佳から電話がかかってきたのは最悪だが、そこでの孝史の対応も最悪！それに対して、「近くにいるのならここに呼んだら・・・」と朔子が声をかけたのは意外だが、知佳が現れた後の朔子の行動を見ていると、その変わり身の見事さに男の私は唖然！これって、ひょっとして強烈な嫉妬の表れ？

さらに、孝史が働くラブホテルでは、なじみの上客の毎度待ち合わせる女の子が変わっていくのが面白い。兎吉の言葉によると、そんな上客に対して決まったムード音楽を流す

のも、家族的なサービスの一貫として大切らしい。しかし、いくら何でもそのお相手が女子中学生ともなれば、孝史の正義感に火がついたのは当然？そんな孝史に対して、兎吉は「バイトは今日まででいいよ」と体のいい「クビ宣言」をしたが、実はこれは兎吉自身が「ここでの（違法な）商売はボチボチ潮時かな？」と考えていたためだ。しかし、若い孝史が兎吉のクビ宣言に素直に従えなかったのは仕方ない。その結果、ＣＤから流れる曲がいつものムード音楽から、杉野希妃が歌う『こんにちは赤ちゃん』に変わり、ホテル中が大騒ぎになるシークエンスは、くだらないバラエティー番組を見ているよりよほど面白い。そんな騒動の末にホテルを飛び出した孝史に朔子が出会えば、その後の「プチ家出」に至るのは必至だが、さて孝史に対する朔子の感情は初恋？また、一夜限りのプチ家出から２人は何を学び、その結末をどのようにつけていくの？

二階堂ふみと太賀という若い２人のみずみずしい演技に注目しながら、そのハラハラドキドキの展開（?）をタップリ楽しみたい。

■□■避難者はみんな反原発？いやいやそんなことは・・・■□■

プロデューサーとして内田伸輝監督と組んだ『おだやかな日常』で杉野希妃は原発事故から必然的に生じたはずの放射能汚染に対する問題意識を明確に打ち出したが、そこでの杉野希妃演じるサエコの行動はかなり変だった（『シネマルーム３０』２０９頁参照）。他方、二階堂ふみが染谷将太と共にベネチア国際映画祭でマルチェロ・マストロヤンニ賞（最優秀新人俳優賞）を受賞した園子温監督の『ヒミズ』では、ラストにみる「住田、頑張れ！住田、頑張れ！」とくり返すセリフの中で走り出すシーンが印象的だったが、この映画は「反原発」の主張を声高に叫ぶものではなかった。しかして、福島の原発被災地から「せめて成長期の子供だけでも安全な場所へ」という趣旨で兎吉のホテルへ避難している孝史は、原発に対してどんなスタンスを？

学生時代に学生運動にのめり込んでいた私が言うのも変だが、今の私は反原発！反原発！と叫んで集会をしたり、デモ行進をするのはあまり好きではない。それは決して私の思想が右傾化したためでもないし、社会問題に無関心になったためでもない。それはともかく、孝史のガールフレンドの知佳が、孝史との初デートの場を反原発の集会にセットしていたのは意外。しかも、約束の場所、約束の時間に行った孝史を待っていた知佳の隣には、反原発運動のリーダーらしき男がピッタリと寄り添っていたから、このデートは一体ナニ？その上、孝史はそのリーダーらしき男から「福島の被災地からの避難者だ」と紹介され、壇上で一言あいさつするよう仕向けられたが、さあそこで孝史はどんな「あいさつ」を？

マスコミ報道では、福島原発からの避難者はみんな反原発が当然であるかのように言われているが、その実態は？壇上で自分の信念に従って、堂々と反原発の演説をぶつことができれば快感だろうが、さて孝史は？ネット配信でそんなシーンを見ていた朔子は、あいさつを終え壇上から逃げるように飛び出した孝史を見て、すぐに孝史のもとへかけつけようとホテルを目指したが・・・。

■□■帰り際のプレゼントとは？このひと夏の経験を大切に！■□■

私は鶴田真由は知性派美人女優だと信じている。本作における海希江役も地域学の研究者というインテリの設定だが、深田晃司監督が打ち出す海希江の心理を見せつけられると、アレレ・・・アレレ・・・。ネタバレを恐れずあえて書いてしまえば、鶴田真由扮する海希江が放つ①「仕事と恋愛は別！」というセリフと、②「大切にしろよ、とにかく産んだんだからね」というセリフは強烈だ。本作鑑賞後、この２つのセリフの意味をしっかり噛みしめる必要がある。

私が本作鑑賞中、初期の段階で気になっていたのは、かなりエキセントリックな性格の辰子が朔子に対して「そのうちプレゼントするね。中味はヒ・ミ・ツ」と言っていたプレゼントとは何か、ということだが、中盤のストーリーの展開があまりにも想定外のため、つい忘れていた。しかし、いよいよ海希江の翻訳の仕事が完成し、２週間の夏休みを終えて海希江と朔子が海辺のまちを離れる時になって、そのプレゼントとは何か？というテーマが浮上してくる。この時点では、私たち観客には、海希江を中心にした大人たちの複雑な（男女）関係が明らかになっているから帰り際に、辰子が朔子にプレゼントした１枚の「写真」の持つ意味がわかるが、さて朔子はそれをどこまでわかっているの？

かつて三人娘と言われた桜田淳子、森昌子、山口百恵の中で、山口百恵は「あなたに女の子の一番大切なものをあげるわ」という意味シンな歌詞の『ひと夏の経験』を歌っていたが、当時１６歳の女の子だった山口百恵はそれをどう理解していたの？この曲のストーリーにおける「ひと夏の経験」が悲しい結末になったのかどうかは覚えていないが、少なくとも本作にみる朔子の「ひと夏の経験」は、学校や塾では決して学ぶことのできない多くのことを学ぶものになったはずだ。翻訳の仕事を完成させた海希江が今後誰とどんな結婚をするのか、それとも独身のまま研究者として生きていくのかは知らないが、朔子はこんな風に貴重な「ひと夏の経験」をさせてもらった海希江に大いに感謝しなければ。そしてまた、この「ひと夏の経験」を大切に！

２０１３（平成２５）年１２月２９日記